

紀元前2千年紀エジプトの葬制の変遷を探る

—ダハシュール北遺跡第30次調査(2024~2025)—

矢澤 健 東日本国際大学エジプト考古学研究所客員教授
吉村 作治 東日本国際大学総長・教授

Investigating the Transition of Egyptian Burial Practices in the Second Millennium B.C.: The 30th Season of Dahshur North Project, 2024-2025

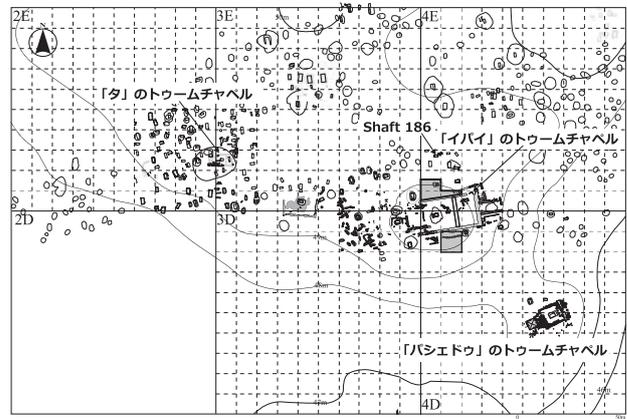
YAZAWA, Ken Visiting Professor, Institute of Egyptian Archaeology, Higashi Nippon International University
YOSHIMURA, Sakuji President/Professor, Higashi Nippon International University

矢澤
健
吉村
作治

1. はじめに

古代エジプトの中王国時代(紀元前21~前17世紀)と新王国時代(紀元前16~前11世紀)では、葬制の様々な側面で差異が見られ、この時期に古代エジプト人の死生観における重要な転換が生じたと想定される。発表者らは、紀元前2千年紀における葬制の変化の特質とその背景を明らかにする目的で、2つの時代の墓が混在するダハシュール(Dahshur)北遺跡を対象に調査研究を進めてきた。これまでの調査結果から、墓の年代や特徴が遺跡内の位置によって異なることが判明したため、2015年以降は調査地区が1~2年ごとに変更され、活動の年代幅や階層差、埋葬習慣の変遷過程などを明らかにすることで、遺跡の全体像を把握することに調査の主眼が置かれた。

2024年に実施された第30次調査では、ダハシュール北遺跡の最初期の調査で発見されたイパイのトゥーム・チャペルの北側と南側に隣接するグリッド(4E1、4E2、4E11 南半、4D82、**図1**)に焦点が当てられた。これらのグリッドでは初期の調査時に上層の砂層の除去が行われたが、地山面までの発掘は当時不要と判断され、実施されなかった。しかし2005年の第10次調査以降、新王国時代の活動に関連する堆積の下から中王国時代のシャフト墓が手付かずの状態で見出されており(Baba and Yazawa 2015: 3-9, 12-14)、これらのグリッドでも同様に、堆積下部に古い時期の遺構が隠されている可能性が指摘された。2024年の調査ではこれらのグリッドの再発掘に加え、第29次調査(矢澤・吉村 2024)で4E21グリッドから発見されたシャフト186の発掘も実施された。なお、発掘調査は2024年8~9月に行われ、出土遺物の整理作業は2025



■ 第30次調査発掘地点

図1 ダハシュール北遺跡全体図と第30次調査区

年2~3月に現地で行われた。

2. イパイのトゥーム・チャペル北側の調査

イパイのトゥーム・チャペルの北側、4E1グリッドから4E2グリッドにかけて、日乾レンガの壁体が倒壊して形成された層が1998年の第3次調査で見出されていた(吉村ほか 1999: 139)。今期調査ではこの倒壊日乾レンガ層を取り除き、その下の状況を精査した。その結果、このレンガ層の直下にある砂層から、現代のタバコの箱の破片、焼成レンガの断片、紅茶の茶葉の箱などが発見された。従ってこのレンガ壁の倒壊は、近年の出来事である可能性が示唆された。調査隊が1995年に初めてこの遺跡を訪れた際には、相応の高さを持つ日乾レンガの構造物は認められなかった(早稲田大学エジプト学研究所 2003)。日乾レンガ壁の倒壊は1995年より遡ることは確かだが、出土したタバコや茶葉の箱の銘柄は明らかに20世紀以降のものであり、比較的近年の出来事であると判断される。



図2 イパイのトゥーム・チャペル北側から発見された日乾レンガ列

倒壊レンガを取り除いたところ、その下層から日乾レンガが列状に配置された遺構が発見された(図2)。日乾レンガは方向を揃えて二列に配列されており、各レンガは鉛直ではなく同一方向に傾斜して立て掛けられていた。日乾レンガ列の長さは約4mであり、イパイのトゥーム・チャペルの軸線と平行していた。レンガの1つの胴面には「オシリス 王の書記イパイ 声正しき者」とスタンプが押印されており、イパイのトゥーム・チャペルで使用されていた日乾レンガと同一のものと考えられる(吉村ほか 1998: 図7.1)。同様の特徴を持つレンガ列は、1997年の第2次調査でイパイのトゥーム・チャペルの南側(グリッド4D82)から発見されていた(吉村ほか 1998: 図4)。これらは、イパイのトゥーム・チャペルの建設に使用するために準備され、そのまま放置された日乾レンガと推測されている。

3. シャフト186の調査

4E21グリッドから発見されたシャフト186(図3)は、シャフト開口部が長さ1.9m、幅0.8mの長方形で、長軸を東西に持つ。シャフト部の深さは8.8mで、底部から西側と東側に地下室が掘られていた。西側のA室は方形の平面を持ち、奥行2.3m、幅2.1m、天井高が1.0mを測る。入口は日乾レンガで封鎖されていたようであり、その底部が残存していた。部屋の内部は盗掘を受け、風成の砂が内部に流れ込んでいた。出土遺物には人型木棺の断片が含まれており、木製の顎鬚や左眼の象嵌などが認められた(図4)。東側のB室の平面は長方形を呈し、奥行1.7m、幅1.2m、天井高は0.9mである。内部の遺物はA室に比して量が少ないものの、木棺片、土器片、石灰岩性ステラの断片が認められた。A室およびシャフト部から発見された土器群は新王国時代第18王朝中期から後期に

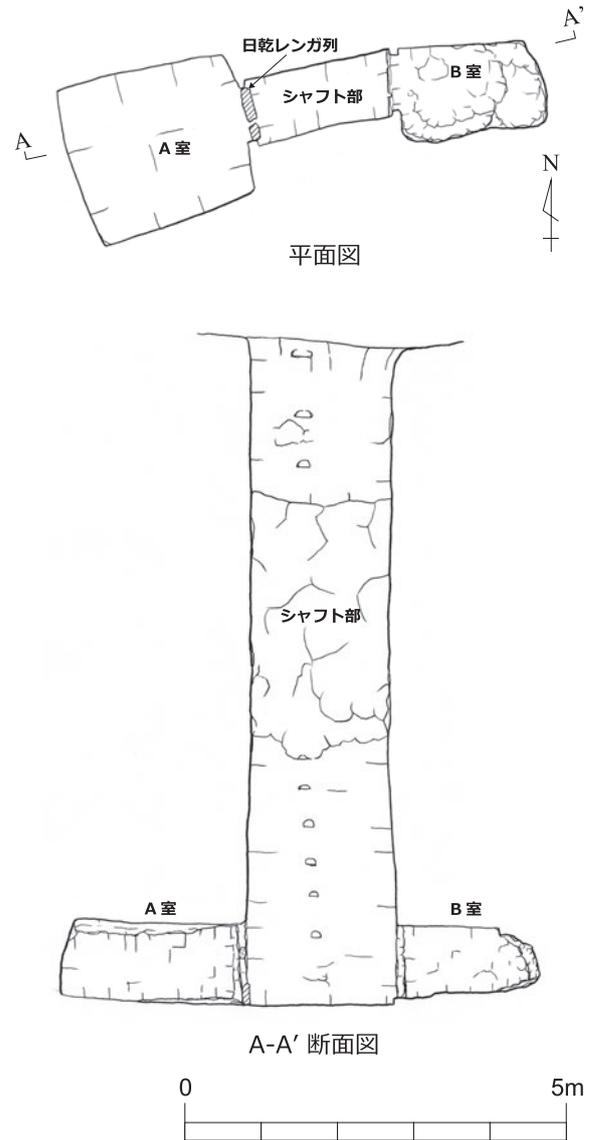


図3 シャフト186平面図・断面図



図4 シャフト186出土遺物(左:木製の髭、右:象嵌の眼)

年代づけられた。本遺跡では今のところ最初期の段階に位置づけられ、この時期の副葬品組成を示す例として注目される。

4. イバイのトゥーム・チャペル南側の調査

イバイのトゥーム・チャペルの南側では4D82グリッドの発掘調査を実施した。同グリッドは1997年の第2次調査で上部の砂層まで発掘が行われており、この年次に前述の日乾レンガ列が出土した。今期は地山までの発掘調査を実施した結果、2基のシャフト墓(シャフト188、189)と、8つの土壙(R01～R08)が発見された(図5)。土壙の内、R01、R02、R04～06、R08は埋葬を伴う土壙墓であることが判明し、R03からは土器群が大量に発見された。イバイのトゥーム・チャペル南側の発掘成果について、本稿では、土壙墓R01と土器が埋納された土壙R03に焦点を当てて報告する。

土壙墓R01は長さ1.9m、幅0.5m、深さ0.9mで、東西方向に長く、西端部はシャフト188と接していた(図6)。内部は礫混じりの砂が堆積しており、底部から木棺の底板らしき木片が出土した。木片の上には骨片が出土していたが、量が少なく断片的であるため、



図5 4D82グリッド(イバイのトゥーム・チャペル南側)の発掘後の状況



図6 土壙墓R01(左)と出土した石灰岩製シャブティ(右)

埋葬姿勢や頭位方向などの情報は得られなかった。土壙底部の東端からは、石灰岩製のシャブティが直立した状態で出土した。シャブティは両手に鋏を持ち、右の背中に籠を背負っている様子が黄色と赤色の顔料によって描かれていた。頭部の鬘部分は青色である。碑文などは見られなかった。

土壙R03は長さ4.0m、幅1.7mの楕円形を呈し、深さは1.2mを測る。土壙内部には砂と礫が堆積しており、深さ0.9m付近から大量の土器片が出土した(図7)。土器の内容物と思われる灰色の粉、白色の粉、微小な植物の一部、繊維の断片などが土器の周囲や内部に認められた。中でも灰色の粉は特に量が多く、土壙全体に広がっていた。出土土器の接合作業の結果、多くはほぼ完形に復原された(図8)。全体がほぼ残っているものが28個体あり、内訳は蓋2個体、小型皿形土器3個体、皿形土器12個体、大型浅皿形土器1個体、大型壺型土器1個体、青色彩文土器1個体、アンフォラ3個体、ミート・ジャー5個体である。これらの土器群は近隣のサッカラ遺跡で発見されたエンバーミング・カシェの土器群との類似がみられ、灰色の粉、白色の粉、繊維の断片が出土する点も同様である。類例の多くは新王国時代第18王朝末の年代を示すものが多く、この遺構も同時期に年代づけられる。

土壙R03の土器群に見られる顕著な特徴として、多くがほぼ完形に組みあがるが、全て割れた状態で発見されていることが挙げられる。さらに、その割れ方の特徴から、意図的に破壊された可能性がある。エンバーミング・カシェではミイラ製作の際に使用されたものが大型の土器に封入されて、葬儀の際、墓の傍に埋納される。しかし今期調査で発見された例は、土器群が土壙に安置されたのではなく、おそらく儀礼的な理由から意図的に破壊されて土壙に埋められた可能性を示しており、当時の葬送儀礼の実態を明らかにする上で有益な情報を提供している。



図7 土壙R03土器出土状況



図8 土壙 R03 出土土器

一方で、土壙 R03 が誰の埋葬に属するものなのかについては、明確な証拠が得られなかった。こうしたエンバーミング・カシェを持つことができた人物は高位の階層に属していたと推測される。第18王朝末に大規模なトゥーム・チャペルを建造することができたイパイは、年代や位置関係からもその有力な候補であるが、確証はない。

5. おわりに

今期調査では、紀元前2千年紀の中でも特に新王国時代の埋葬に関する情報が得られた。イパイのトゥーム・チャペルの北に位置するシャフト186は本遺跡の新王国時代の墓で最初期の埋葬であることが判明し、本研究の主要テーマであるメンフィス地域の新王国時代の墓地資料を用いた編年構築のための重要な資料となる。トゥーム・チャペルの南側ではシャフト墓と土壙墓に加えてエンバーミング・カシェ(土壙 R03)が発見された。本例のエンバーミング・カシェは土器が意図的に破壊された痕跡が認められ、この破壊行為は儀礼行為の一部であった可能性が示唆されており、メンフィス地域における葬送儀礼の実態を示す貴重な証拠

として評価できよう。

本研究は日本学術振興科学研究費補助金、基盤研究(B)「古代エジプト新王国時代のメンフィス編年の構築とテーベとの比較研究」(研究代表者：吉村作治、課題番号：23K20519)の助成を受けて実施された。

参考文献

- ・ Baba M, and K. Yazawa 2015 Burial Assemblage of the Late Middle Kingdom Shaft-Tombs in Dahshur North. In W. Grajetzki and G. Miniaci (eds.), *The World of Middle Kingdom Egypt, Middle Kingdom Studies* 1, 1-24. London, Golden House Publications.
- ・ 矢澤 健・吉村作治 2024「紀元前2千年紀エジプトの葬制の変遷を探る—ダハシュール北遺跡第29次調査(2023)—」『第31回西アジア発掘調査報告会報告集』102-106頁 日本西アジア考古学会。
- ・ 吉村作治・近藤二郎・長谷川奏・中川武・西本真一 1999「エジプト ダハシュール北遺跡発掘調査報告—1998年 第3次調査—」『人間科学研究』第12巻第1号 137-149頁。
- ・ 吉村作治・近藤二郎・長谷川奏・中川武・西本真一・柏木裕之 1999「エジプト ダハシュール北遺跡発掘調査報告—1998年 第1・2次調査—」『人間科学研究』第11巻第1号 109-120頁。
- ・ 早稲田大学エジプト学研究所(編) 2003『ダハシュール北 [1]—宇宙考古学からの出発—』アケト出版。